

英国「ブレグジット」の行方

——離脱交渉の厳しさに直面するメイ政権

在英ジャーナリスト 小林恭子

6月に解散総選挙に打って出たメイ首相だが、単独過半数の獲得に失敗。
EU 離脱交渉に影を落としている。

欧州連合 (EU) に加盟し続けるか離脱するかについて、英国で国民投票が行われたのは 2016 年 6 月 23 日だった。43 年間も加盟してきた EU (当初は EC) から離脱する選択は「まさか、ないだろう」という期待は大きく裏切られ、離脱派が僅差で勝利した。英国内外に衝撃が走った。

残留派を主導したキャメロン首相がすぐに辞任の意を表明し、元内相のテリーザ・メイ氏を首相とする新政権が生まれたのは、同じ年の 7 月中旬。あっという間の政権交代だった。それでも「ブレグジットはブレグジット (何としてもブレグジットをやり遂げる)」と宣言したメイ新首相に、「この人に任せれば、きつとうまくいくだろう」と国民は大きな期待をかけた。

しかし、それから 1 年余の現在、メイ政権に対する好感や期待はほぼ消えた。ブレグジット実現への道も、その歩みは遅々としており、思ったように進んでいない。

なぜこのような行き詰まり状態にあり、今後どうなるのかに注目してみた。

首相の慎重な足取りと大きな賭け

欧州理事会のトゥスク議長 (EU 大統領) にメイ首相が署名をした通知書簡が手渡されたのは、今年 3 月 29 日であった。離脱過程を規定するリスボン条約 50 条には、交渉期限は通知から 2 年と

定めてある。これでようやく 19 年 3 月末には英国の EU 離脱が実現する見込みとなった。

さあ、いよいよ交渉に向かうのだろうと思ったところ、メイ首相は大きな賭けに出た。

慎重すぎるほど慎重と言われるメイ首相はそれまで「総選挙はやらない」と何度も述べていたが、4 月 18 日、「6 月に解散総選挙を行う」と宣言したのである。この時、与党保守党と最大野党労働党の支持率の差は 20 ポイント以上あった。残留派の政治家や国民が、2 度目の国民投票を行ってブレグジットを覆そうという動きもあった。高い支持率を追い風として、メイ首相は離脱交渉に先駆けて「国民を 1 つにまとめる」ために、総選挙に打って出たのである。

この賭けは裏目に出た。まず選挙公約にケチが付いた。介護費用の負担設定の変化や児童への無料の昼食提供の廃止などが入ったために、弱者攻撃と受け止められた。選挙期間中に発生した複数のテロも足を引っ張った。労働党が「政府が警察の人員を削減したから、テロを防げなかった」と主張したからだ。

遊説中には、台本通りに話すことを好むメイ首相と、反核・反戦運動の経験が長く、人前で即興のスピーチをすることが得意中の得意のコービン労働党党首との差がはっきり出てしまった。また、労働党の選挙公約は若者層にアピールするも